

経済産業省・独立行政法人情報処理推進機構
第3回 データマネジメント人材の育成に関するタスクフォース
議事要旨

- 日 時 令和7年7月17日（木）10:00～12:00
■場 所 経済産業省（本館2階東1 未来対話ルーム）
■事務局 経済産業省、独立行政法人情報処理推進機構

1) 前回タスクフォースの振り返り

事務局より、「前回タスクフォースの振り返り」について説明が行われた。

2) データマネジメントの全体の論点

事務局より、「データマネジメントの全体の論点」について説明が行われた。

3) データエンジニアの役割・スキルの整理

伊藤委員より、「データエンジニアの役割・スキルの整理」について説明が行われた。
その後、委員間で討議が行われた。

- データエンジニアは、比較的アジャイル型の開発を行う機会が多いが、ウォーターフォール型の開発が必要な場合もある。また、データエンジニアは従来のエンジニアよりもビジネスの理解が必要なことも特徴ではないか。人材像の議論としては、求められるマインドを検討すべきであり、開発スタイルはあくまで傾向として捉えた方がよい。
- データエンジニアのスキルを応用情報技術者試験で問うことを考えた場合、「技術・実装スキル」および「(データとの) 関わり方のスキル (ex.メタデータ活用、データライフサイクル等)」はイメージしやすいが、「コミュニケーションスキル」については議論が必要である
 - データエンジニアを増やしたいということは共通見解だが、データエンジニアの要素の組み込み先が応用情報技術者試験であり、技能型と捉えられることで議論を複雑化している。今回は、将来的に職業型のデータエンジニア試験が切り出されることを前提として、応用情報技術者試験にデータエンジニアの要素を加えるための議論としたい。
 - まずは応用情報技術者試験にどう組み込むかを議論してほしい。また、デジタルスキル標準にデータマネジメントの職種の定義を新設することを次のステップと

してつなげたい。

- 基幹系開発のゴールは運用開始だが、データ活用系開発はプラットフォームが稼働した段階がスタートであるため、システムエンジニアとデータエンジニアの分界点になると思う。また、システムエンジニアの中にもデータエンジニアがいることを表現すると、データエンジニアという職種の幅が広がると思う。
- 基幹系開発の設計にデータエンジニアがアサインされないため、利用しづらいシステムになったという事例があった。基幹系開発にもデータエンジニアは必要だと思う。
- データ設計を行う職種を明確にすると、データアーキテクチャ、データエンジニア、データスチュワードの関係が分かりやすくなると思う。
 - 必ずしもデータスチュワードが上流工程を担当して、下流工程の実装フェーズをデータエンジニアが行うというわけではないということを共通認識としてもっておくとよい。また、基幹事業とデータ活用が密接に融合している事例もあることから、基幹事業を支えるサービスについても、データエンジニアが活躍しているということを補足する必要がある。
 - 職種は分業化していくため、データエンジニアの職種も一つには定義されないということを共通認識としてもっておくとよい。
 - IT エンジニアの視点に偏るのではなく、データを活用するビジネス側のユーザー視点で、今後の議論を進めていきたい。

4) 新試験要綱

事務局より、応用情報技術者試験の「試験要綱」への追加文案について説明が行われた。その後、委員間で討議が行われた。

- 期待する技術水準の案に「組織のデータ活用におけるデータ提供に際して」とあるが、データを渡して終わり、改善活動などを行わないと誤解される可能性がある。データ活用における基盤を守る役割として説明できるとよい。
- 「探索、収集、抽出」等が「品質維持活動」の後方に書かれているが、プロセスの順番にした方が理解しやすいのではないかな。
- 応用情報技術者試験の期待する技術水準は、データ活用の主体者なのか、支援者なのかで変わってくる。「支援を行える」水準と定義するのであれば、支援の意味合いをはっきりさせた方がいい。
 - 「支援」ではなく「推進」がいいのではないかな。
- 「組織のデータ活用におけるデータ提供に際して」を「組織のデータ活用に資す

る・・・」にしてはどうか。

- 「組織のデータを活用する」や「ビジネスの推進に寄与するデータ化を推進」など、目的を明確にしながら説明した方がよい。
- DMBOK2 の知識領域の一つの「データストレージとオペレーション」で示されている、データの収集、分析及び蓄積するソフトウェア、並びに基盤の管理をどうするか明確にしておいた方がいいのではないかな。
- 構造化データのみが出題対象であるに見えるが、非構造化データを含めた方がいいのではないかな。
 - 同意する。生成 AI を意識するのであれば、非構造化データを出題対象とする必要がある。意識しないと今後の時代についていけないと考える。
 - 経産省としては、非構造化データを意識するスタンスで推進する。
- 例えば、「分析基盤構築」や「データガバナンス」のような攻めのデータマネジメントに関するキーワードも、文章の前半に入れたい。

5) プロモーション戦略

事務局より、「プロモーション戦略」について説明が行われた。佐伯委員及び上田委員、河本委員から、プロモーション活動について説明が行われ、その後、委員間で討議が行われた。

- データマネジメントを経営層に理解してもらうためにはどのようなことを行えばよいかな。
 - 既に DX 関連について経営層にアプローチがあるが、具体的な活動がわからない状況にある。このタイミングでデータマネジメントが具体的な DX の実現方法だと説明するとよいと思う。
- プロモーションの仕方はいくらでもあると思っている。社員の出身大学のつながりを使って学生に説明するということもできると思う。
- 講演が分かりやすく、公的感があり、さらに若手に受けるようなイベントを定期的の実施する点はブランディングとしてよいと思う。
- 企業が大学の教育に協力するという事例はあると思うので、これをもっと広げていくといいと思う。
 - 企業が大学で講演する際の講師はシニア世代が多かったが、この機会に、なるべく現場に近い若い人材も講師ができるようになるといいと思う。
- SNS 上で活躍している人をいかに捕まえることができるか、それをどこで見つけるか

ということがポイントになってくると思う。

→ 最初に目に入る魅力的なデザイン、キーワードを打ち出せるかということが大事だと思っている。また、データを活用して、キーワードやハッシュタグに含めるような対策を行った。

- 現在、IPA が人材育成のプラットフォームを構築している。スキルの情報基盤として活用できるとよい。

以上

<お問い合わせ先>

経済産業省 商務情報政策局 情報技術利用促進課

電話：03-3501-1511（内線：3971～3975）

独立行政法人 情報処理推進機構(IPA) デジタル人材センター 人材スキルアセスメント部

お問い合わせフォーム：info.ipa.go.jp/form/pub/inquire/itec